

提出日: 2024 年 5 月 28 日

研究促進期間制度 研究実績報告書

所属学部・研究科	身分	氏名
文学部	教授	大田美和

研究期間	以下1～4より、取得した研究機関を選択し、該当番号を右欄にご記入ください。
	1. 2023年4月 1日 ～ 2024年3月31日 2. 2023年9月 1日 ～ 2024年8月31日 3. 2023年4月 1日 ～ 2023年9月20日 4. 2023年9月21日 ～ 2024年3月31日 1
活動報告	研究期間中に実施した研究活動を具体的にご記入ください。 海外活動補助費を受給した方は、海外活動の内容が分かるようにご記入ください。
	2023 年 4 月末から 8 月初めに英国のマンチェスター大学で作家 Elizabeth Gaskell に関する研究活動を行なった。マンチェスター大学のメインライブラリーと John Rylands Research Library、マンチェスター市の Central Library 等で作家 Elizabeth Gaskell の一次資料、同時代の出版物、現在までの研究書などの資料収集と調査を行った。マンチェスター大学教授の Michael Sanders 氏と近代英国の文学・文化と社会の研究と、社会への還元について、意見交換を行った。Elizabeth Gaskell House や John Rylands Research Library で開催された複数の対面・オンラインの発表会を聴講した。 小説の舞台となった Morecambe 湾、Silverdale、Knutsford、Dunham Massey Park などでフィールドワークを行なった。マンチェスターの博物館や図書館、オルドバラ音楽祭の参加型のイベントに参加して、研究成果や芸術活動の市民への還元の実例を調査し、ジェンダー主流化とフェミニズム、レイシズムと植民地主義の克服をめざすアカデミアと市民の連携による文化発展事業について考察した。 ロンドンの美術館テート・ブリテン(Rossetti 展と Isaac Julien 展)とロイヤルオペラハウス(エジプトのフェミニスト作家ナワル・エル・サーダウィの小説を原作とするオペラ <i>Woman at Point Zero</i>)でも資料収集と調査を行なった。 帰国後は、アフガニスタンの亡命詩人ソマイア・ラミシュが始めた世界的文学運動「詩の檻はない」に参加し、日本とフランスで出版されたアンソロジー(8 月および 11 月)に作品を掲載、朗読会(10 月)と座談会(12 月)「アフガニスタンの詩人と日本の詩人たちの知性対話 言論の自由と女性の地位、社会の解放について」の企画運営と質問作成と広報活動に関わり、朗読者・対談者・通訳者として登壇した。2024 年 1 月にはフランスペンクラブ主催の朗読会にライブ出演し、スピーチと自作朗読を行なった(YouTube で現在も視聴可能)。 12 月に、「詩の檻はない」の活動の精神を受け継ぐ特別公演「ガザ・パレスチナへの詩と歌 第二のナクバに対して」の立案に対して、企画の協力と助言を行ない、3 月末まで広報活動を行ない、2024 年 4 月 22 日の公演で朗読を行なった。

得られた研究成果について	上記の研究活動の結果、得られた研究成果についてご記入ください。
	クリエイティブライティングの成果として、Read Manchester's Poetry Place に英詩'A Gatekeeper'を応募し、入賞した(May's Winnners3 名の一人に選ばれた)。 英国ギヤスケル協会主催のツアーIn the Footsteps of Mrs Gaskell a Sojourn to Rome(9 月 22 日～9 月 29 日)で、9 月 28 日の夜、ミニレクチャー “My Research about “The Sexton’s Hero””を行ない、好評を得た(‘Gaskell Society Newsletter’ No.77 (Spring 2024) p.26 に紹介記事掲載)。 『中央評論』No.326(中央大学出版部、2024Winter)に、論考「詩は息をするようなもの アフガニスタンの詩人の呼びかけに応える詩集に参加して」を発表した(「ウェブ・アフガン」に紹介記事掲載)。1. マンチェスターでの在外研究と詩作、2. アフガニスタンの詩人の呼びかけ、3. 出版と朗読会 の三部構成。 『詩と思想』5 月号(第 3 巻第 438 号)(2024 年 4 月末発行)に、英国で体験した様々な形の詩的プロテストの中に、日本の現代アーティストの詩的営為を位置づけた論考「ハイパー能『投石』と『悲しき建国記念日』 桜井真樹子の詩的挑戦」を発表した。 特別公演「ガザ・パレスチナへの詩と歌 第二のナクバに対して」で当日配布されたアンソロジー(後日、書籍化して出版予定)のために「あとがき」を執筆し、この公演と『詩の檻はない』の文学運動との関連、この公演は英国在外研究で学んだ「詩的で政治的で美しい芸術作品」の実践であることを示した。
今後の計画について	得られた成果を踏まえ、今後どのように研究を発展させる計画か、ご記入ください。 2024 年 10 月 5 日開催予定の日本ギヤスケル協会大会(於 日本大学文理学部)で講演「ギヤスケルのマンチェスター」を行なう予定。 マンチェスター等で収集した資料を論文化し、文学部紀要や『英国小説研究』などに発表する予定。